

小学校の特別支援学級でのボランティア活動における

臨床心理学専攻の大学生の体験

情報共有用電子掲示板の分析より実践から得られる学びに着目して

The experiences in volunteer work of college students majoring clinical psychology at a special education resource room—By analyzing of the bulletin board system for sharing of information—

割澤 靖子

Yasuko Warisawa

東京大学大学院 教育学研究科

Graduate School of Education, The University of Tokyo

Key words: clinical psychology practice and training, primary school, special needs education

目的

近年、臨床心理士養成の大学院における学生の教育の在り方についての議論が活発となり、その1つとして、外部実習機関における臨床実務実習の役割の重要性が指摘されている(伊藤ら, 2001)。関連して、臨床実務実習における学生の体験や学びに焦点を当てた研究や報告が日々積み重ねられており、これらの知見は、臨床心理士の養成・教育の在り方を検討する上で有用な資料となると考えられる。一方、多くの臨床実務実習は、スーパービジョン、カンファレンス、研修など、様々な専門的指導・教育と平行して経験される。そのため、臨床実務実習から得られる“自然過程としての学び”と、大学院のカリキュラム全体を通して得られる“専門的指導・教育の効果としての学び”を区別して捉えることは難しい。しかし、これらの2つの学びを区別し、臨床実務実習から得られる“自然過程としての学び”を丁寧に把握した上で、その学びを促進し補うための専門的指導・教育の在り方について検討することには意味があると思われる。

そこで本研究では、『専門的な指導・教育を受ける体制が整わない中、臨床心理学専攻の大学生が、小学校特別支援学級におけるボランティア活動を通してどのような体験をしたのか』を丁寧に記述し、そこから“自然過程としての学び”について考察を深めることを目的とした。

方法

対象：特別支援学級でのボランティア制度に登録した臨床心理学専攻の大学3・4年生、計15名(筆者を含む)。
手続き：学生たちが、情報共有用電子掲示板(2004年4月—2005年3月)に記載した活動記録を、グラウンディング・セオリー・アプローチを援用して分析した。

結果

活動開始当初の学生は、【分からないことだらけでんやわんや】の状態の中、【子どもの言動に癒されたり】【戸

惑ったり】しながら、【とりあえず思うように子どもに関わる】。そして、学生は、子どもの反応に一喜一憂しながら、【漠然とした分からなさが徐々に緩和される】体験と、【具体的な分からなさが徐々に積み重ねられる】体験を行き来する。そして、この【具体的な分からなさが徐々に積み重ねられる】体験が、傷つきを伴う反面、【子どもがその言動をとった理由を考える】、【子どものことをもっと知ろうと考える】、【どのように関わるべきかを考える】など、考えを深める起点になる様子が示された。

その後、学生は、【子どもの言動を理解する方法を模索する】、【より意味のある関わりを模索する】という2つの視点を軸に、【自分の関わりを振り返り】、主体的に【知識や情報を得ながら】、より一層考えを深めていく。そうした中で、【自分の関わり】の中でも【大切にしたいもの】と【修正したいもの】があり、得られた【知識や情報】の中にも、【共感できるもの】と【共感できないもの】があることに自覚的になる。そして、【自身が大切にしたい価値観に目を向け】、その上で【自らの関わりをより意識的に選択する】ようになる様子が示された。さらに一部の学生は、【自身が大切にしたい価値観】に反するものを排除せず理解を深めようと試行錯誤する視点を持ち、【新たな価値観を構築する】ことが示された。

考察

以上の結果から、学生は『分からなさについて考える』ことを軸に自ら学び深めていく様子が示された。得られた結果からは、知識や方法の提示だけでなく、『考えること』を支える指導・教育の意義が示唆されたと言える。

参考文献

伊藤直文・村瀬嘉代子・塚崎百合子・片岡玲子・奥村茉莉子・佐保紀子・吉野美代(2001)；心理臨床実習の現状と課題 学外臨床実習に関する現状調査 心理臨床学研究,19(1),47-59.